

平成 26 年 3 月号

今月の断酒表彰

M・Tさん 南千里支部 断酒六ヶ月

O・Hさん 吹田支部 断酒一年

断酒表彰おめでとうございます。ますますのご活躍を期待いたします。

<平成 26 年 2 月 1 日入会>

T・Nさん 吹田支部

新しい仲間です。よろしくお願ひします

断酒に思う(45)レポート

「アルコール依存症を作る社会？」

吹田支部 N・Kさん

なぜ、コンビニでも酒を売ようになったか？
なぜ、コーヒーより安い酒が流通するようになったのか？

時代背景を含めて、レポートを書くようにと当会の D・A 氏に依頼され、何からどのような切り口で行くのか漠然としすぎてまとまるのか疑問だが、独断と偏見で私見としてこのテーマに答えてみる。

まず、コンビニで酒を売れるようになったのは、初期の頃は、「酒販免許」を持っている酒販店がコンビニになる形と「酒販免許」を持っている所をフランチャイズ化する事で酒の販売を行った。この頃と前後して、『酒』の自動販売機での深夜販売禁止の業界自主規制が始まっていたと思う。

酒税法の改訂で、2001 年 1 月に距離基準（既存の販売場から一定の距離を保つ）が廃止され、2003 年 9 月に人口基準（一定人口ごとに販売免許を付与）が廃止され酒類の販売が事実上「自由化」された事で比較的簡単に販売免許を取得出来るようになったことが、どこのコンビニでも酒を置いていると云う状況となった。

改訂前は、「酒類の販売免許」の取得は既存の酒販店を保護する意味合いもあり免許の取得には制約が多く、簡単には取得出来ないのが業界の常識だった。また、大規模店舗の出店規制も緩和されており、ますます「酒販小売店」は経営が厳しくなっている。

「酒」だけでは商売が出来なくなりつつあるコンビニ店へ転換。

法律では、「未成年者飲酒禁止法」1922 年（大正 11 年）3 月 30 日制定の、販売時には未成年者保護のため年齢を確認するとの項目があるので基本的には、対面販売となる。販売機会の拡大の為には 24 時間開いている営業形態が有利になる。



平成 26 年 3 月 1 日発行 133

編集・発行 事務局・広報部

<http://suitashi-danshukai.com>

3 月 8 日(土)は、ハートふれあい祭りです。吹田市断酒会として 3 回目の参加となります。アルコールパッチテスト等、お手伝いして頂ける方は、9:00 に浜屋敷に集合して下さい。

コンビニはこの目的に合致している。他、コンビニに買い物に来た客のついで買いも戦略の一つとして挙げられる。

次になぜコーヒーよりも安い酒が売られるのかについて。

かつては、『酒税』は高等級の酒ほど高税率を賦課していたが、洋酒生産国より非関税障壁との批判が（外圧）たかまり現在では、「アルコール度数において等しい税率を賦課する」に法改正されている。酒類の生産ピークは 20 年前位で毎年下がり続けている。これを打破しようと各メーカーは「低アルコール」「機能系」「低価格」等で鎬（しのぎ）を削っている。ここで、酒の税金について（酒類値上げ前です）お酒には、約 18%～38%の酒税と 5%の消費税がかけられている。

ビール 350ml で見てみると、小売価格 230 円でアルコール分 5.5%で酒税 77 円、消費税 11 円で約 38%が税金です。節税対策として開発された第 3 のビールでも約 25%が税金です。

「国酒」の日本酒で約 18%、焼酎で約 21%です。ワイン 8.4%、ウイスキー 22.5%が賦課されています。

アルコール度数によって増減しますが目安です。

昨今は、若年層のアルコール離れが取り上げられているが、「家飲み」や今までアルコール飲料に馴染みのない女性や機会飲酒者を取り込もうと RTD とされる低アルコール飲料やノンアルコール飲料が市場シェアが広がってきている。

酒税が少なくなった分価格は下がるし、企業努力と原材料の見直しで原価も下げているので安く提供できる。

あまり安いものは原料に「？」がつくが・・・消費者ニーズに応えるという形で 100 円前後のアルコール飲料が市場に出回る様になったと思われる。



【今月の「指針と規範」】断酒会規範

一 断酒会は酒害者による酒害者のための自助集団であると同時に市民活動団体である

断酒会は、自らの意思によって酒を断とうとする酒害者が運帯してつくった組織である。

断酒会は、酒が原因でつくられた様々な問題をお互いの信頼関係を通して解決し、新しい人生を創ろうとする酒害者の組織である。

断酒会は、平等な立場で参加した酒害者の主体性によって運営される組織である。

また、酒害者の真の理解者は酒害者であるので、断酒会は自らの断酒のみならず、酒で苦しんでいる地域の酒害者のために何をすべきかを常に考え、積極的に援助活動をする組織である。

従って、断酒会は酒害者のみによって構成され、あらゆる面で自立を重視する自助集団である。自助とは自らの努力で自らを救うことであり、自助集団とはそうした人たちが集まり、それぞれの力を結集して、より大きな力を生み出す組織のことである。

その大きな力を生み出す原動力は、何といてもわれわれ酒害者同士の一体感である。共通の悩みを持ち、断酒新生という共通の目的を持つわれわれは、お互いが酒害者であるがゆえに融合し、ひとつの大きな力となった。アルコール依存症は不治の病であるという社会の偏見をくつがえし、現在、数万の酒害者がひたすら回復の道を歩んでいる。

われわれはそのひとつになった大きな力を断酒会と呼び、断酒会があるからこそ個人の断酒があるという、共通した認識を持つようになった。断酒会をひとつの物質にたとえると、われわれはその物質を構成しているひとつひとつの分子であるということである。



(指針と規範 P46 ~ P47)